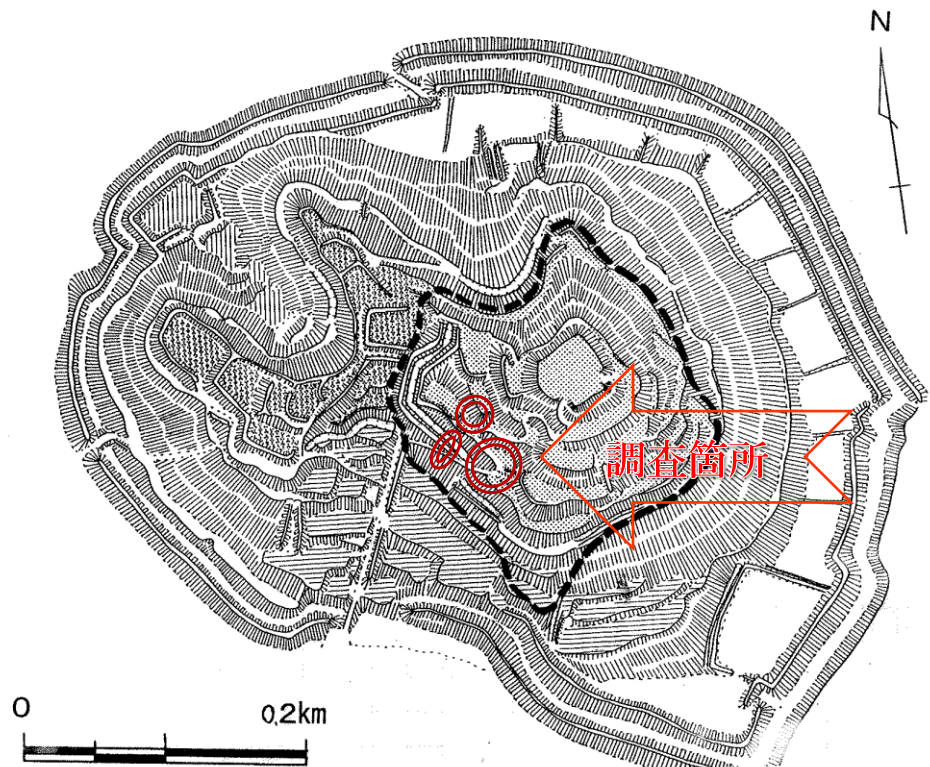


# 史跡小牧山大手道第2次発掘調査 現地説明会 資料

令和7年12月13日(土)

小牧山城縄張図  
(破線の範囲が主郭地区)



春日井郡小牧村古城絵図(模写・部分拡大)  
※十七世紀中頃 名古屋藩蓬左文庫所蔵



## 1 調査の概要

### 遺 跡 名

こまきやまじょう

小牧山城（国指定史跡 小牧山）

### 所 在 地

愛知県小牧市堀の内一丁目地内

### 調 査 理 由

史跡整備

### 調 査 面 積

約 413m<sup>2</sup>

### 調 査 期 間

令和7年5月～令和8年2月（予定）

### 調 査 主 体

小牧市教育委員会

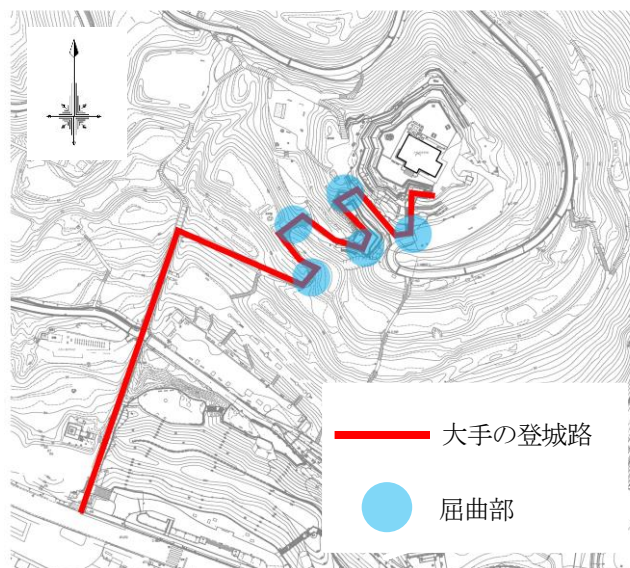


図1 大手の登城路のルート

本年度は、史跡小牧山の大手の登城路の発掘調査を実施しました。麓から山頂へ至る大手の登城路は、麓から中腹に至るまでは北に向かって直進し、中腹で東に直角に折れ、更に直進したのち、山頂まで「コ」の字型の屈曲を5回繰り返します(図1)。大手の登城路では、これまでも試掘・発掘調査を行っており(付表1参照)、永禄期(織田信長築城時)の登城路の状況や、永禄期以降に改修が加えられていることを確認しています。

## 2 調査の目的

今回の調査区(図2)は、一番下の屈曲部(A 地区)、下から2番目の屈曲部の北側隅部(B 地区)、中腹で東に折れ直進する大手の登城路とその北に沿う土塁と空堀部分(C 地区)にあたります。

A 地区では、一番下の屈曲部における大手の登城路の位置や構造、山側の法面の状況を確認するため、B 地区は、大手道と曲輪 004 南東法面の状況や屈曲部北側の入隅の状況を確認するため、C 地区は、小牧・長久手の合戦時に改修された登城路や土塁、空堀の状況を確認するために、それぞれ調査区を設定し、調査を行いました。調査で得られた主な成果は以下のとおりです。

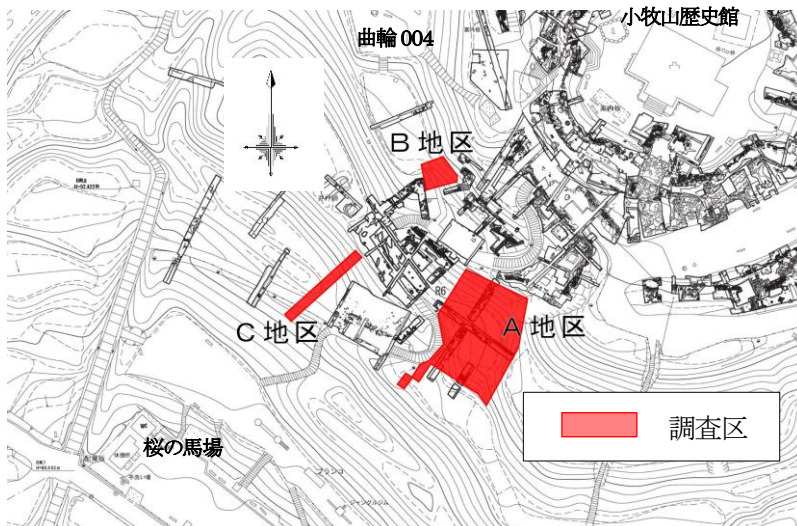


図2 調査位置図



### 3 調査成果（何が見つかったのか）

#### 【A 地区】

#### ①【大手の登城路の一番下の屈曲部（調査区南側）】

#### 登城路の東脇に石垣によって作り出された平坦な空間を確認。

令和6年度のトレンチ調査では石垣の存在を確認しており、石垣の構造、規模を詳しく調べるために調査をしました。その結果、この石垣は2度屈曲することが明らかとなりました。

石垣（南面）（写真1）は、築石の一部と裏込石が残存していました。築石は最大で3段分残っていましたが、裏込石の残存状況から、本来は約120 cmの高さがあったと考えられます。石垣の上部は崩落しており、原形をとどめていませんが、石垣の上が土の法面になる腰巻石垣であった可能性が想定されます。石垣の構築状況を確認するために、基底石の前面にトレンチを入れたところ、基底石の下部に薄く扁平な石材が据えられていました（写真2）。また、石垣（南面）の内、西側は築石が滅失していましたが、同様な扁平な石材（写真3）や裏込石が残っていたことなどから、本来は石垣があったと考えられます。石垣（南面）の推定延長は9 mであり、石垣の東端から東側は土の斜面になっています

この石垣に使用される石材の多くは小牧山産堆積岩ですが、石材の中には花崗岩4石と川原石3石が含まれていました。花崗岩や川原石は小牧山の外から持ち込まれた石材で、花崗岩については、小牧山の北方約3 kmにある岩崎山から運んできたものと考えられます。花崗岩の石材が使われていることなどから、この石垣は永禄期に築かれたものと推定されます。築石の大きさは、縦15～40 cm、横20～70 cmです。裏込石は径10～20 cmの角礫が主体で、川原石も使用されています。



写真1 石垣（南面）検出状況





写真2 基底石下部の扁平石材検出状況



写真3 扁平な石材検出状況

石垣（西面）（写真4）には、築石は一つも残存していませんでしたが、裏込石が残っていたことから、石垣があったと考えられます。石垣は裏込石の残存状況などから、南から北へ登っていく大手の登城路の傾斜に基底石の高さを合わせながら築かれていたと考えられます。

石垣（北面）（写真4）は、5石の石材が残存していました。裏込石の残存も確認できましたが、周辺の遺構面の高さなどから考えると、石垣はそれほど高く積まれていなかったと想定されます。

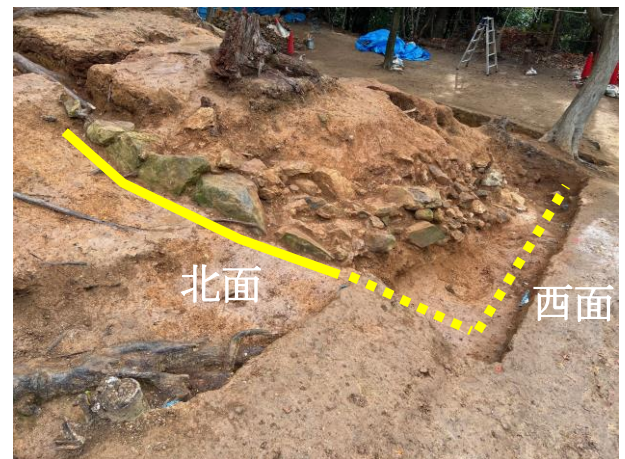


写真4 石垣（北面～西面）

石垣の上部には平坦な面が造られており、この平面上にはピットなどの遺構がありましたが、その遺構の性格は現在のところ不明です。

昭和2年地形測量図（図3）を見ると、図内赤丸部分が東から西へ突き出すような地形になっています。上記の石垣の確認された場所とちょうど重なっており、昭和2年時点では石垣の構造を反映させたような地形があったと考えられます。



図3 昭和2年地形測量図



## ②【大手の登城路北側斜面（調査区北側）】

**大手の登城路沿いの石垣を確認。石垣は切り立てられた土と岩盤の上に築かれる。**

調査区北側の山の斜面では、上半が石垣、その下が切り立てられた土と岩盤から成る壁面を確認しました。今回の調査では出隅の位置を確認することができ、主郭地区第12次発掘調査（令和元年度）と大手道第1次発掘調査（令和6年度）で確認した石垣が連続することが明らかとなりました。

石垣の石材が残存していたのは、基底部の石材のみでした（写真5）。基底石の下に木の根が入っており、本来の位置から移動してしまったものもありました。残存する石垣石材は小牧山産堆積岩で、大きさは、縦15～25 cm以上、横25～60 cm、奥行き35 cm程度です。裏込石は径10～20 cmの角礫が主体で、裏込石の奥行きは40 cmほどです。

石垣の下部は、土と岩盤を切り立てており、約60度の傾斜があります（写真6）。斜面の東側では岩盤はほぼ露出しておらず、土の切岸となっています。切岸は緩やかに屈曲し、南側に折れていきます。南に折れた先の切岸の傾斜は30～35度と、北面の傾斜と比べても緩やかになっています。



写真5 石垣検出状況

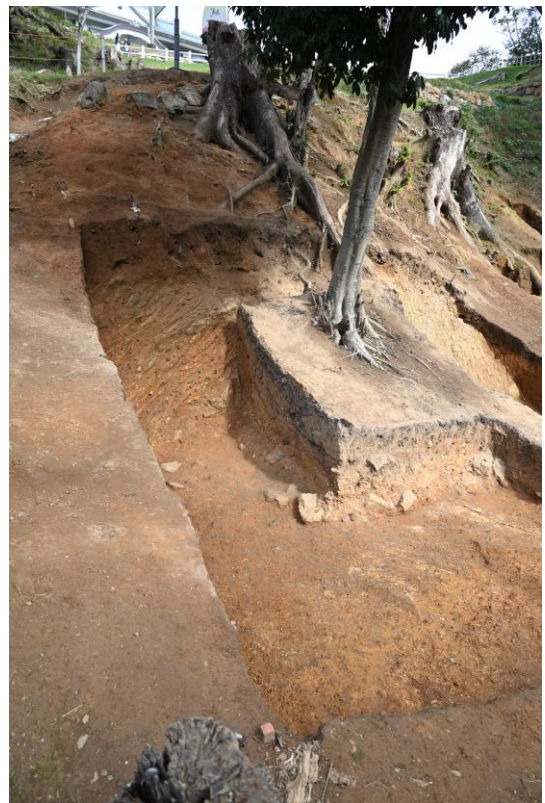


写真6 切り立てられた岩盤  
(大手の登城路沿い)

## 【B 地区】

B 地区では、大手の登城路と、その北にある一段高い曲輪（曲輪 004）の間の法面の状況を確認するために調査を行っています。詳細については、現在も調査中ですが、登城路と曲輪の間については、曲輪 004 を造成するために土を積んだり、また、一部では岩盤等を削ったりすることによって、高さ約 2.5m 程度の段差を造り出していました（写真 7）。

## 【C 地区】

### 天正期に築かれた空堀と土塁の状況を確認。

C 地区では、中腹で東に折れ直進する大手の登城路と北側の土塁、空堀にトレンチを設定し、調査を実施しました。

#### 〔空堀〕

今回の調査地では、空堀は岩盤を削平して掘られていました（写真 7）。堀底は岩盤を平らに削り出しており、幅は約 2m ありました。空堀の山頂側法面の下方では岩盤を削平しており、法面の傾斜は約 40 度です。



写真 7 空堀検出状況（天正期）

#### 〔土塁〕

土塁は天正期に築かれたもので、上記の堀底からの土塁頂部までの比高差は 1m 以上ありました。調査区内では、土塁の東側法面と考えられる傾斜を確認したため、今回の調査地点が土塁の東端と考えられます（写真 8）。

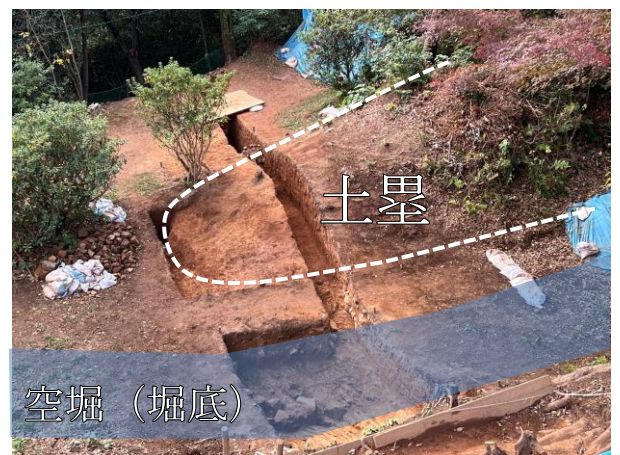


写真 8 土塁検出状況



## 現地表面の約 1.5m 下で、永禄期の両端に石積を伴う登城路を確認。

現地表面の約 1.5m 下で確認した永禄期の登城路は、山頂側と山麓側の両側に石積が築かれていました。

山頂側の石積の石は2段分で高さ約 40 cm であり、上部は崩れていると考えられます（写真 9）。各石の大きさは 15 cm 大～30 cm×20 cm 程度です。山麓側の石積の石は4段で、永禄期の登城路とほぼ同じ高さまで積まれていることから、ほぼ当時の様相を残していると考えられます（写真 10）。各石の大きさは 15 cm×5 cm 程度の薄いものと、25 cm×20 cm 程度です。

永禄期の登城路からほぼ現地表面までの約 1.5m は盛土されています。この盛土の土は、砂礫層や粘質土層などです。この砂礫層には岩盤が砕けたような礫片が多く含まれており、天正期の空堀を掘削する際に岩盤を削って生じた礫片や土を使ったことが想定されることから、過去に実施した試掘調査（第1次、第2次、第4次）の調査成果を踏まえると、天正期（小牧・長久手の合戦時）に改修されたと想定されます。

しかしながら、天正期に 1.5m の盛土をした場合、相対的に土塁の高さが低くなり、城としての防御力が低くなってしまふことを考えると、陣城として小牧山を改修した天正期ではなく、土塁が必要でなくなった時期に盛土をしたと考えることもできます。

慶長期には、名古屋城築城のため小牧山から石材を運び出しており、この石材を運び出すための石曳道として、登城路を改修した可能性もあります。

永禄期の登城路の上層の盛土については、今後検討を行います。



写真9 大手道山頂側石積（永禄期）

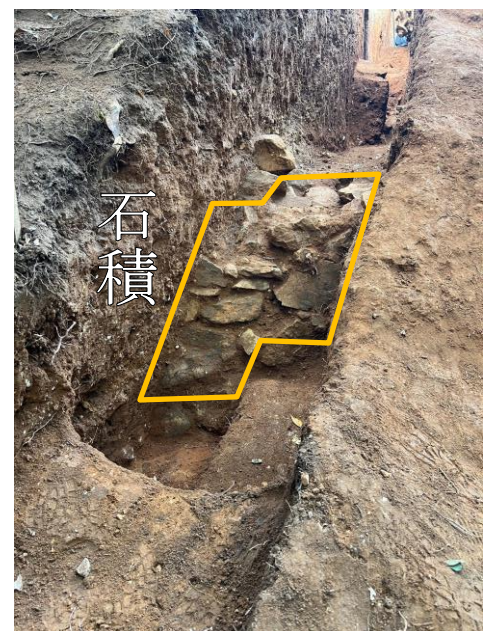


写真10 大手道山麓側石積（永禄期）

## 4 まとめ

これまでの長年にわたる発掘調査と今回の調査成果により、小牧山城の大手登城路では、山頂の大手口からつづら折りの一番下の屈曲部に至るまで、連続して石垣を築くなど、その構造などが明らかとなりました。また、つづら折りの一番下の屈曲部の西側の登城路では、永禄期には、登城路の両側に石積を築いていたこともわかっています。主郭（本丸）に築かれた段築状の石垣だけでなく、麓から直線的に上ってきた登城路を東に曲がった箇所から始まる連続した石積と石垣は、当時も小牧山城の登城者を圧倒させたものと考えられます。

また、A 地区においては、大手登城路の東脇に石垣による平坦面（曲輪）が造成されており、曲輪の性格は断定できませんが、信長の築城時の大手登城路の構造を考える上で、大きな成果であると考えられます。

C 地区においては、これまでの調査と同様、永禄期の登城路の上層に盛土が行われている状況を確認しました。この盛土はこれまで天正期の改修によるものとしてきましたが、慶長期の造成の可能性も想定しながら、更なる検討を行います。

### 【用語集】

石積（いしづみ）・石垣（いしがき） 石を積み上げて築いた垣や壁で、裏込石のないものを「石積」、裏込石のあるものを「石垣」と呼んでいます。

基底石（きていせき） 石垣の最下段の石

腰巻石垣（こしまきいしがき） 下半分が石垣、上半分が土の法面という構造の石垣

裏込石（うらごめいし） 排水や背面の土圧を調整し、石垣を崩れにくくするため石垣の背後に入れられた石・礫のこと。栗石（ぐりいし）とも呼ばれる。

出隅（でずみ） 石垣の隅部（折れ曲がる部位）が外側に突き出すもの。

入隅（いりすみ） 石垣の隅部が内側に折れ込むもの。

切岸（きりぎし） 山の斜面を人工的に削って断崖としたもの

ピット 発掘調査現場で見つかった小さい穴や細い穴状の遺構



付表1：大手の登城路周辺におけるこれまでの主な調査成果

調査年	調査名	主な成果
平成16年(2003)	1次試掘 (A地区)	信長築城時(永禄年間)の大手道を小牧・長久手の合戦(天正年間)時に地形を改変する造成を行っていることを確認(下記2次・4次試掘も同様)。永禄年間に築かれた石積を確認(山側)。
平成17年(2004)	2次試掘 (14トレンチ)	永禄年間に築かれた石積を確認(山側・谷側)。
平成19年(2006)	4次試掘 (22トレンチ)	永禄年間に築かれた石積を確認。 道に平行に築かれた排水用の溝を検出。
平成23年(2011)	4次発掘	主郭に至る大手虎口の構造の一端を確認。
平成24年(2012)	5次発掘	大手道脇で切り立てられた岩盤を確認。築城時の道幅が5.4mと推定。
平成27年(2015)	8次発掘	主郭に至る大手虎口の構造を確認。
平成28年(2016)	9次発掘	大手道の経路、その側面に設けられた石垣・岩壁を確認
令和 元年(2019)	12次発掘	大手道の岩盤と石垣の壁面を確認。道幅は6~7m。
令和 3年(2021)	2工区発掘	2段の石垣と人工的に切り立てた岩盤で構成される大手道の壁面を確認。
令和 6年(2024)	大手道第1次	切り立てられた土と岩盤と石垣による大手道の壁面を確認 大規模な造成によって、平坦面を造り出していることを確認

付表2：織田信長天下統一への過程と城郭

年 代	信長年齢	できごと	城郭名	信長築城か？
弘治 元年(1555)	22 歳	清須城入城	清 須 城：石垣なし	×
永禄 3年(1560)	27 歳	桶狭間の戦いで今川義元を討つ		
永禄 6年(1563)	30 歳	小牧山城築城、清須から移る	小牧山城：石垣構築	○
永禄10年(1567)	34 歳	稲葉山城攻略、岐阜城と改め 小牧山城から移る	岐 阜 城：巨石石積	改修
天正 4年(1576)	43 歳	安土城築城開始	安 土 城：総石垣	○
天正10年(1582)	49 歳	本能寺の変		

付表3：小牧山の歴史

時 代	年	できごと
戦国時代	永禄 6年 (1563)	織田信長が小牧山城を築城し、清須から移る。小牧山南麓には城下町を整備。 織田信長、稲葉山城を攻略。岐阜と改称し、小牧山から居城を移す。
	10年 (1567)	小牧山城は廃城となる。
安土桃山時代	天正12年 (1584)	小牧・長久手の合戦（羽柴秀吉軍と織田信雄・徳川家康連合軍の戦い） 織田・徳川連合軍は織田信長の小牧山城跡を改修して陣城を築く。
江戸時代	慶長年間	名古屋城築城。小牧山城の石垣石材を持ち出しか？ 小牧山は尾張藩領となり、家康ゆかりの地として、一般の入山が禁止される。
明治時代	明治 2年 (1869)	版籍奉還により、小牧山は国有地となる。
	6年 (1873)	県立「小牧公園」として一般公開される。
	21年 (1888)	山頂西側の曲輪に創垂館が建設される。
	22年 (1889)	小牧山が徳川家の所有となり、一般公開を止める。
昭和～令和	昭和 2年 (1927)	10月26日 国の史跡に指定される。
	5年 (1930)	徳川家から小牧町（当時）へ小牧山が寄付される。
	22年 (1947)	東麓に小牧中学校が建設される。
	24年 (1949)	創垂館が現在地に移転される。
	43年 (1968)	山頂に小牧市歴史館が建設される。
	平成10年 (1998)	小牧中学校を史跡外へ移転する。
	15年 (2003)	小牧中学校跡地を史跡公園として整備、開放される。
	16年 (2004)	主郭地区試掘調査開始（～平成20年まで：第1～4次調査）
	20年 (2008)	主郭地区発掘調査開始（～令和4年まで：第1～13次調査、他）
	31年 (2019)	小牧山城史跡情報館（れきしるこまき）オープン
	令和 3年 (2021)	主郭地区整備工事開始、小牧市創垂館保存修理工事
	5年 (2023)	小牧山歴史館（旧名称：小牧市歴史館）リニューアルオープン
	7年 (2025)	創垂館が国登録有形文化財（建築物）に登録される。

史跡整備工事実施中です

小牧市では、市のシンボル「小牧山」の整備を進めています。  
現在は、山頂一帯で、これまでの発掘調査成果を反映して、石垣の復元や園路の整備等を行っています。  
今年度は小牧山歴史館南東側部分（右図参照）を整備しており、工事期間中は園路と山頂の一部が利用できません。



整備工事中はご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をお願い致します。

小牧市教育委員会 小牧山課



